

アジアの老年医学，認知症診療に触れて

國時 景子

(日老医誌 2018 ; 55 : 696-697)

チャオプラヤ川流れる岸辺，バンコクのマヒドール大学シリラート病院で行われたマスタークラスに参加してまいりました。今回のテーマは Dementia Care でした。私の所属する東北大学病院 加齢・老年病科の専門分野ということもあり，非常に興味をもっていた一方，脳画像を専門とする研究室に所属し，老年医学のスタートラインに立ったばかりの私にとって，診断後のケアはなかなか手が届きづらいところもあり，貴重な勉強の機会をいただくことができました。

プログラムでは認知症の診断や BPSD への対応など日々の課題のみならず，予防から End-of Life Care まで多岐にわたり，各国の先生方から直接お話を聞くことができました。朝早くから講義続きで寝そうだな，と心配していましたが，そんな暇はないほど興味をそそられる内容ばかりで，講演後の質問タイムには次々意見が飛び交い，それぞれの国の実情や診療にける熱意を感じることができました。

そのほか，認知症関連の Clinical Case のグループディスカッションや，それぞれの研究内容のプレゼンテーションなど，小グループでのワークショップもあり，役割分担したり，協力しながら話し合いを進めたりと，学生に戻ったようで新鮮でした。日本では少子高齢化が医療以外の分野でも差し迫った問題となっていますが，そうでないアジア各国の先生方もそれぞれの視点で老年医学に取り組んでいることが分かり，自分たちの強みをどう生かしていくべきか，モチベーションにつながりました。

会期中はランチにディナーに，ホテルの部屋も相部屋と，ほかの参加者と話す機会が豊富に設けられていました。参加者の多くにとって英語が母語ではない中，それぞれが一生懸命コミュニケーションを取ろうとして下さ



写真 グループ C の皆様と

り，私もつたないながら研修制度や診療体制，悩んだケース，各国のおいしいごはんなど，楽しく交流を図ることができました。と同時に，やはり教養・ツールとしての英語の重要性を再認識する機会にもなりました。

プログラムの空き時間には，シリラート病院内にある伝統医学アーユルヴェーダの診療部門も見学させていただきましたが，フロアに足を踏み入れた途端に癒しの香りに包まれ，施術の過程や自由診療の VIP ルームにも感動しました。その後，街中でのアーユルヴェーダの実地体験に出かけたことは言うまでもありません。今まで一体何を背負っていたのか，というくらい肩が軽くなりました。

終わってみますと，微笑みの国タイに違わない主催者の皆様の温かいホスピタリティと，講師の先生方，参加者の皆様の柔らかく明るい雰囲気のおかげで，本当にあつという間で密度の濃い 3 日間を過ごさせていただきました。開催前に送られてきた日程表を見て，朝 6 時半集合，夜 9 時までイベント続きと知った時，微かに恐怖

を感じたことも、今となっては良い思い出です。

このような機会を提供してくださいましたIAGG、日本老年医学会の皆様改めて感謝申し上げます。来年は

フィリピンで開催予定と聞いておりますので、少しでも興味を持たれた若手読者の先生方には、ぜひ参加をお勧めしたいと思います。